# 生贄ヒーロー

鈴木真心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
生贄ヒーロー

【Ｎコード】
Ｎ５４７５Ｗ

【作者名】
鈴木真心

【あらすじ】
突然、目の前には美女と美男子が。
北京で蝶が羽ばたけば、ニューヨークで嵐が起こる？
都内某所某アパートで欠伸をすれば、異世界に召喚される！？
生贄ヒーローと呼ばれる二十九歳ＯＬ　木村ヨリの、わけもわからず始まってしまった下ネタ満載逆ハー（？）異世界冒険譚！

## バタフライエフェクト

北京で蝶が羽ばたくと、ニューヨークで嵐が起こる。
アマゾンを舞う一匹の蝶の羽ばたきが、遠く離れたシカゴに大雨を降らせる。

そんなカオス理論があるけれど。

じゃあ、東京の某所某アパートで欠伸をしたら？

あたしは木村ヨリ、二十九歳、独身。

真面目にってわけじゃないけど、それなりに普通には働いてて、それなりに普通に酒も飲めば煙草も吸う。
それなりに普通に片手以上両手未満の男と付き合い、今のところ、それらは手元に残ってはない。
特別何かが出来るわけでも、また、出来ないってわけでもないと思う。

そう、仕事から帰って、キャミとショーパンに着替えてからベッドで欠伸をするまでは。

「……何」

疑問符さえ付かなかった。
正直に言うと、完全に、現状に対して思考が置いてきぼりだった。

「待ってたよ、生贄ヒーロー」

突如目の前に現れたお姉さんは、真っ黒いロングワンピースらしきものを着ていて、謎のヒーロー発言をしてから、それはそれは妖艶に微笑んだのだ。

――お姉さんは、絶世の美女だった。

じゃ、なくて。
ヒーローって何？
ヒロインじゃなくて？
いや、まあ、二十九歳でヒロインてのは流石に痛いと思うけども。
いや……『生贄ヒーロー』って、どういう……？
それより、取り敢えずお姉さんの髪は真紅だけど染めてるの？
似合うけどさ。

「生贄（スケープゴート）とでも言えばわかるんじゃない？ねえ、わかる？『生贄（スケープゴート）』」

うわっ！

び、びっくりした！

美女の隣から突然の登場を果たした彼は、上から下までキンキラキンのこれまた絶世の美男子。
金髪に金眼、真っ白なお肌に金の刺繍が施された真っ白な詰襟ジャケットとパンツを着用している。

……何かこう、お姉さんと言い美男子と言い、やたらとファンタジーな格好してるね。

……ファンタジー？
……あはは、まっさかー。

ていうか、別の言い方したところでそれって結局生贄だよね。
この時代に日本で生贄？
そんなのあるの？
土葬の習慣はまだ残ってるところもあるらしいけど、流石に生贄はないんじゃないかなあ……。

ていうか。

「日本語上手いね」

言うに事欠いて、第一声がそれでした。

さて、冷静に考えた場合、人の瞳の色は濃褐色（ブラウン）、淡褐色（ヘーゼル）、琥珀色（アンバー）、緑色（グリーン）、灰色（グレー）、青色（ブルー）に大別される。
中には青紫色（ヴァイオレット）や赤色（レッド）を持つ人もいるけれど稀であって、赤色に限っ

ては人類人口の０．００１パーセントと言われるほどだ。
何故詳しいかって？
興味があって調べたことがあるからです。

ふと、美男子を見やる。
やっぱり、金の目の色をしている。

……イエローベースの琥珀色（アンバー）と見間違えたかとも思ったけど、違う。
彼のそれはキンキラキン、紛うことなき金色。

……
……

……　あ　り　え　な　い。

――ふと見渡せば、周りは真っ黒だった。
のに、この二人だけ、見えてる？
明かりなんてどこにもない。
寧ろあたしは、鳥目で夜目は効かなかったのに。

違うでしょ。
あたし、さっきまで何してた？
帰ってから着替えて、ベッドに胡座掻いてビール飲もうかなって思いながらそれをテーブルに用意して、手を伸ばしたところで欠伸をしただけだよね？
寝てない。
あたしまだ寝てない。

だからこれは、夢じゃないってことだけは、断言出来る。

「な……何事！？」

急にこわくなって挙動不審に陥れば、パリーンッと何かが割れた音。

「ひいっ！？」

暗いのこわいのに、その上何なの！？
またも動揺を上乗せすれば、またまたガコーンッと何かが落ちたみたいな音。

もう勘弁してええぇえ！！！！！
意味がわからないし、何はともあれ本当にこわいから！
暗いのだめだから！

「落ち着いて」

お姉さんが、この世とは思えない妖艶な笑みを浮かべてそう言った。

「お、落ち」

着けない。

とまでは言えず。

唇に何かが触れて、……あ、ちゅうされたのなんて久しぶり……とかばかなことをぼんやり考えてたら、視界が暗転して。

「おはよう、気分はどう？」

気づいたら、

「――え？」

真っ裸のお姉さんに抱かれて、ふっかふかのベッドにいました。

「え……――あ、れ？」

お姉さん――胸が真っ平らなんだけど。

## ファーストインパクト

「二度目まして。俺はビィビィナタニェル・ブロウズ・ランジェラ」
「ビ、ビィビィナ……？」
「ふふ、ＢＢでいいよ」

優しく髪を梳かれて、頭がぼんやりとする。
ＢＢ……で、いいのか……で、ＢＢで……ベッドで……ふかふかで……真っ平ら……で――

真っ平ら、だよね。
真っ裸、だよね。
俺って、言ったよね。

「男ぉ！？」
「そうだよ……あ、見えてるよ」

がばっと距離を取り起き上がったあたしの肩から、するりと上掛けが滑り落ちる。
それをさり気なく引き上げてくれたＢＢ。
あ、ありがとう。
じゃ、なくて。

「ごめん、ちょっといろいろわからないんだけど、何？何なの？ここどこ？貴方誰？何があってどうなってこうなってる？」
「俺はＢＢ・ランジェラだってば」
「ああ、うん。ＢＢだよね、さっき聞いた」

聞いたけど、聞いたのもわかったのもそれだけ。
何より先に、取り敢えず。

「やって、ないよね？」

失礼、と一言添えて、ぱっと上掛けを捲ってばっとそれを戻す。
……二人とも真っ裸でした。

疑わしい……けど、正直、悲しいかな、寝込みを襲われたことはないので、そこまで自分に魅力があるとは思わないけど。
思わないけど、事実は事実として、彼はそこに真っ裸で横たわっている。

じいいっと穴が開くほど見詰めた彼の瞳は、あたしと同じ真っ黒。
それがまた、妖艶に弧を描いて――。

「同じ色を初めて見たけど、そそられるもんだね」
「は？」

「そうだね、それもいいかもね。簡単だし」

くるんと、視界が反転した。
目の前にはＢＢがいる。
その思ったよりしっかりとした肩越しには、見たこともない高い天井。

どこなの？
何なの？

「大丈夫だよ」

――何が？

という言葉は柔らかな唇に飲み込まれ、あれよあれよという間に――

……快楽の波に飲み込まれてました。

べ、別にあたしが特別ライトなわけじゃないのよ！

……腰が痛い。

「大丈夫？ヨリ」

すっかりあたしを抱き込んだＢＢが、気遣わし気に覗き込んでそう言った。
大丈夫かと言うわりに、腰に回された腕は、押しても引いてもびくともしない。
ちくしょう、乙女が皆、一回寝たくらいで絆（ほだ）されると思うなよ！
一回どころじゃなかったけどね！

「ねえ、大丈夫？」

絶世の美女が――いや、美女じゃないんだけど、とにかくこんな美人が心配気に二回もそんなこと口にしたら、一般人のあたしには文句も喉から押し戻されてしまう。

「だ、大丈夫だけど……」

腰はすこぶるぎしぎし言ってるけども。

とまでは、やっぱり言えず。
ただ、さり気なくマッサージしてくれてる辺り、手馴れてるなあと思いつつも、ありがたいのでやっぱりそれも言わない。

「初めてじゃなかったから、もしかしたら曖昧な部分もあるかもし

れないけど」
「処女崇拝は海外から来た文化だから、あたしには通用しません」
「何の話？」

貴方が言い出したんですよ。

「あれ？情報の共有が出来たはずなんだけどなあ」

情報の……共有？

わけがわかめです、と言い掛けて、握られた手を見詰めながら、はたと気づいた。

彼はビィビィナタニェル・ブロゥズ・ランジェラ。
大抵の人にはＢＢ・ランジェラで通している。
淫魔族の青年で、あたしと共に在るべく選出された者。
ここはイヴィーと呼ばれる世界の中心にあるタンジーナバロウ大国王宮の一室で、あたしのために用意された場所。
そしてあたしは――召喚された生贄。
生贄（あたし）は剣（つるぎ）。
剣は鞘を探すべく、世界を旅して平和を、安寧の世を保たねばならない。

――何で、そんなことが頭に浮かぶの？

「ああ、大丈夫みたいだね」

握られた手は緩く解かれ、またも、真っ黒の目が弧を描く。
真っ黒……ＢＢの瞳は夜色だなあと、頭の片隅でぼんやりと思った。

「何かよくはわからないけど、あたしは召喚されたってこと？戻れるのかな？」

そういえば、名乗ってないのにＢＢはあたしの名前を知っていた。
それもつまり、情報共有ってことなんだろうか。

まあ、されたものは仕方ない。
こんなラノベも真っ青な事象が、あたしに起こるとは思わなかったけど。
あたしが楽観的でよかったね。
卒倒しただけで済んだんだから。
普通なら、もしくはもっと気が弱い子とか繊細な子だったら、もっと大事になっててもおかしくないと思う。

しかしだ、戻れると言うなら、全て水に流す！
細かいことはこの際気にしない！
何故なら、やっぱりよくわからないから！

「……戻りたいの？」
「まあ」
「あれ？」

首を傾げたＢＢにつられて、同じく首を傾げる。

「俺ね、淫魔族なの」

「そうみたいだね、よくわかんないけど」

ファンタジー過ぎちゃって思考が追いつかないので。

「淫魔族ってさ、房術（ぼうじゅつ）が使えるんだよね」

「棒術？」

カンフーみたいな？

長い棒を振り回して戦うのが得意ってこと？

あれ、カンフーってそういうものだっけ？

で、それが今、何の関係が？

「うーん……セックスすることで相手に魔力を流して、いろいろ出来るんだよね。傷を癒すとか体力回復とか、魅了（チャーム）とか」

「へえ、便利だね」

やっぱりよくわからないけどね。

「魅了(チャーム)を使ったんだよ、さっき」
「え？」
「ヨリってさ、気が強そうなんだけど、啼いてるときは思った以上に可愛いなあって。つい」

待って。
待って待って、ようやくだいぶ、ちょっと理解が追いついた。

つまり。
あたしとのセックスで魔力とやらを使って、あたしを自分に夢中にさせてパシリにしようとしたってこと！？

「だから、戻りたいなんて思わないはずなんだけどなあ」

とか、何とかかんとか。
聞こえません。
聞きません！

「最低じゃねえか」
「……何か、大幅に勘違いしてる？」

勘違いではなく事実です。
よかった、効いてないみたいで！

「うーん……もしかしてヨリも『無の魔力』持ち？」
「何の話？」
かくっと首を傾げたなら、形良い眉が少しだけ顰められた。
「……異邦人だからなのか、上手く情報共有が行き渡ってないみたいだね」
異邦人なのは、あたしのせいではありません。

## ロングロングアネーム

で、結局薬局何なのかって言うと。

わからないままに、またもや見知らぬ方々がご登場あそばされました。

――ドアを蹴破って。

「ＢＢ！気配を消すなと何度言ったら……」

「お前はいつも口うるさいね」

「そういう問題ではないだろう！」

そういう問題じゃないのかもしれないけど、そこの貴方も目前の大問題をまる無視してますよ。

あたし、一応三十路直前とは言え、嫁入り前の乙女なんだけど。

ドアを蹴破るほどの方々に、そんな意見をする勇気がないのが悲しいけどね。

真っ裸なんだけどね。

ええもう、上掛け一枚引っ剥がしたら真っ裸なんだけどね。

とは言え、三十路直前なだけあってか突然いろんなことがあったからか、ぼんやりとＢＢ達のやり取りを眺めながら、あたしは達観していた。

悟り？

これが噂の悟りの境地なの？

それはさておき。

見知らぬ方々はＢＢ含めて総勢四人。

それはもう、目も眩むほどカラフルな方々だった。

入室早々ＢＢに突っかかった硬派な感じの彼は、さっぱりショートにした髪の毛が群青色（ウルトラマリンブルー）で瞳の色は青色（ブルー）。

まあ、青繋がりで妥当と言えば妥当な色合い。

その後ろで黙ったままＢＢを呆れ気味に見据えている大人っぽい彼は、漆黒のストレートヘアを右側にきゅっと束ねていて、瞳の色は氷みたいな薄い青（ブルー）。

色素が強い黒が地毛なら、目の色は珍しいことになるのかな。

でも、ありえないわけではないよね……ない、はず。

ここまではいい。

無理矢理よし、とする。

問題はここからで、漆黒の彼の隣でベッドに腰掛けてＢＢとにこやかにライトに笑い合う彼は、最初に会ったキンキラキンの美男子だ。

四人共にかなりな美人さんだとは思うけど、ＢＢと彼だけは格が違う。

とんでもなく、ずば抜けて美人。

話が逸れたけど、彼はとにかくキンキラキンなのだ。

やっぱりおかしいでしょ！？

ありえないでしょ！？
明るい場所で見たって、あれはやっぱり琥珀色（アンバー）なんかじゃないもの！
まじまじと見詰めていたからか、キンキラキンくんがふと、ようやくあたしの存在に気づいた。

「あ、起きた？」

さっきから起きてましたよ。

にこっと、それは眩しく笑顔を浮かべられ、やっぱり喉から押し戻されてしまうあたしは悲しき一般人。
キンキラキンくん、ビューティーオーラが半端ないね！

「はじめまして、ええっと……」
「ヨリ、木村ヨリだよ」

二度目ましてなんだけどね。

「ヨリ！僕はディルディペルティア・アルマスィマッチ・ピピウォッチ！」
「ディルディ……ええっと」

ＢＢもだったけど、長ったらしいな、もう。

「ディルでいいよ」

にこっと笑ってくれたのでにこっと笑い返したら、

ぐっと、

乳を鷲掴まれました。

――は？

「ち、乳を鷲掴むな――――――！！！！！」

思わず叫んだだけだった。

のに、バリーンッて、何かが割れた。

ふわりと風が舞い込む。

薄暗かった部屋に、ちらりと光が射した。

……あれ、今気づいたけど、もしかしてこの部屋、真っ暗だった？

え、何で気づかなかったの？

「まだ喚ばれたばかりで落ち着いていないんだ。あまり興奮させるな、ディル」

漆黒の君が呆れ気味にディルを諌める。
けど、今、そういうことが問題だったの？
何かいろいろ違う気がしてるのは、あたしだけなの？
何が割れたの？
何で割れたの？
何で見えるの？

意識してみれば、やっぱり部屋は真っ暗で、けれど、あたしはしっかりと四人を目視出来ている。

あ、やばい。
また混乱しそう。

よし、一回忘れよう！

漆黒の君がついと前に出たので、それに合わせて視線を上げた。

「わたしはエウ・スィ・ヴァラフ。竜族だ」
「……はあ」

――　他　に　ど　う　言　え　と　！？

聞き間違いじゃないよね。
聞き間違いならそれでいいし、冗談なら「やぁだあ、アメリカンジョーク？」なーんて笑ってあげてもいいんだけど。
眉間に寄ったシワを見留めたのか、エウの表情が険しくなった……のは、間違いないと思う。

「ＢＢ、お前ならとっくに、情報共有を図ったと思っていたんだが」
ちょっと棘があったのも、たぶん、気のせいじゃないな。
ＢＢは「まあね」と軽く受け流してから、ちらりとあたしに視線を寄越して、また腕を絡めてきた。

「お前、やはり……！」
「まあ聞いてよ。情報共有はしたんだよ、ただ、ヨリは異邦人でしかも処女（おとめ）じゃなかった。だからかはわからないけど、情報が断片的で全て行き渡ってはないみたいなんだよね」

真っ赤になって激昂した硬派くんを宥め、ＢＢは、さらりとそんな説明をしてみせた。
……デリカシーとか、どっかに捨ててきちゃった人達なんだね。
やった後に言うのも何ですが。

「ちなみに、魅了（チャーム）もあんまり効かないよ。この世界に馴染んでなかった最初だけ、かな」
「ふむ……」

エウが何か思案する素振りを見せたけど、あたしは今、別のことを

考えている。
最初だけ。
最初だけって、言ったよね。

思い出せ、呼び起こせ、あたしの脳味噌！
最初って……あれか、暗転したちゅうか。
つまりだ、ちゅうからセックスに持ち込むまでが最初か。

「神様……！」
「「「「！？」」」」

急に祈りのポーズを取ったあたしに四人の視線が向けられたけど、
そんなのはどうでもよかった。

あたしやっぱり、ライトなわけじゃなかったんだ！
よかった！
あれはよくわからない魔力とやらが作用していただけだったんだね！

「……お前は巫女なのか？」
「そんなわけあるか」

硬派くんの青色（ブルー）をひたと見て、あっさり否定を口にした。
あたしはただのＯＬです。

てか、ごめん。
硬派くん、名乗ったっけ？

貴方の名前まで長ったらしかったら、あたしもう、覚えきれないけど。

## ロングロングアネーム（後書き）

エウさんの名前はスワヒリ語から拝借しています。
【エウスィ】は【黒】
【バラフ（作中ヴァラフと表記）】は【氷】
という意味だそうです。
ＢＢとディルは、長ったらしい名前がつけたかっただけです。

## そして、ロングロングタイムアゴー

――昔々。

世界イヴィーは、魔族、妖精族、竜族、人間がいがみ合い殺し合い、混沌としていたという。

イヴィーの東の大陸に、タトゥーナという人間の女性がいた。
彼女は絶大なる魔力で以て、たった一人で世界を渡り、平和と安寧をもたらした。

そんな彼女はあるとき、帰還の旅の途中でアウゼンベルグという名の剣士と恋に落ちる。
しかし彼は、タトゥーナを陥れようとする傭兵であり、彼女は彼によって討たれてしまう。

タトゥーナはアウゼンベルグを呪った。
タトゥーナは世界中をも呪った。

わたしが愛したというのに。
わたしが救ったというのに。
何故、わたしがこんな目に遭わねばならぬのか。

彼女の死に際の呪詛はタトゥーナ自身を剣に、アウゼンベルグを鞘へと変えた。

わたしで以て貴方を貫き、一つとなるまで、世界を赦さない。

そして剣は忽然と消え、鞘はこの世界のどこかで、剣が収められる

ときを待っているという。

呪詛によってその身に受けた、禍々しい瘴気を撒き散らしながら――。

「これが、イヴィーに伝わるタトゥーナ伝説。剣と鞘の物語とも言われてるね」

「はあ……」

侍女のメルボリーちゃんに櫛を手渡されながら、ＢＢは、長いんだか短いんだかな伝説とやらを語ってくれた。

てか、メルボリーちゃんがいるなら、貴方がいる必要はどこに？

赤茶色のふわんふわんした髪を揺らしながら、「ではまた。ヨリ様、失礼致します」と可愛らしい笑顔で礼をして退室していった彼女を横目で会釈しつつ見送り、そんなことを思った。

メルボリーちゃんも淫魔族らしいけど、そうは見えなかったなあ。

人は見掛けによらないのかな。

ある意味、ＢＢは見掛けによらなかったけど。

「ヨリはやけに髪が短いね。せっかく綺麗な黒髪なんだから、伸ばしてみたら？」

速攻で終わってしまったヘアブラシを残念そうに鏡台に置いて、麗しき絶世の美男は、ふうと溜め息を零した。

ちなみ、あたしはベリーショートの楽ちん加減が非常に気に入っているので、伸ばすつもりは毛頭ない。

ついでに、その誰それさんとか言う彼女の伝説もどうでもいい。

横文字の名前なんぞ、一辺に覚えられません。

いやでも、覚えておいた方がいいの？

少しずつ冷静になってきた頭は、情報を整理しようと躍起になってフル稼働中。

……また卒倒したりしたらどうしよう。

好きなことを考えたりしたりするのは苦じゃないけど、どっちかって言うと、考えるより動く方が得意なあたし。

断じて理論派でも思考派でもない。

ついでに言うなら、食後のデザートをスウィーツとも言わない。

ああ、また思考が逸れちゃった。

残念なおつむだわ……。

「よし、出来たよ」

鏡の中のＢＢが、にこりと綺麗に微笑んだ。

出来たのか。

出来たのね。

……

……

……何か、少年みたい？

少年少女の若かりし思春期時代はとっくの疾うに過ぎたし、そんなことを口にするのも確かにおこがましいんだけど……

だけど……あれ？

何か、気のせいじゃなければ、若返ってない！？

「ヨリはあんまり造形が崩れないタイプなんだね」

こわい！

意図せずしてモノローグと会話が成立しちゃってそうな、貴方のその発言がこわいよＢＢ！

やめてよ、嘘でしょ、言わないでよ、お願いだから、

「馴染んでない内にしちゃったから、ちょっと副作用が出ちゃったみたいだね」

「やっぱりいいいいいっ！」

言わないでって言ったじゃない！

言ってないけど、言った！

頭を抱えて叫んだ木村ヨリ、二十九歳独身。

不慮の事故で――若返ってしまいました。

さてさて、今さらだけど、あたしはあんまり女の子らしくない。
ボーイッシュってわけでもないけど、友達曰く、女の子特有のねちっこさとかぶりぶり感とか、そういう可愛らしさが大幅に欠けているらしい。
そして乳のボリュームも大幅に欠けているらしい。
体も華奢と言えば聞こえはいいけど、ガリガリで丸みもない。
初めてベリーショートにしたときなんて、「すごい！超似合う！ヨリ的ベストヘアスタイル！」と男女共に大絶賛されたくらいだ。

つまり、若い頃から少年のような外見だった。

キャップを被れば妹にだって、「お姉ちゃん、少年のようだよ」って言われたくらいに。

「まあまあ、昔話ついでと思えば。人間の女の子は、皆、歳は取りたくないものだって聞くしね」

……何をさらっと言ってんの。
ばちんとウィンク決めれば、大抵のことは許されると思ってんの？
こ れ だ か ら 美 人 は や あ ね ！
偏見じゃないよ、今のは！

「いいわけないじゃん！」
「どうして？」
「どうしてってか。あのね、少なくともあたしは、二十九歳の自分が気に入ってたの！煙草も吸えるし酒も飲める！自分でお金も稼げるし、すきなこと出来るし！」
「セックスも出来るし？」
「……」

淫魔族って、頭の中セックスしかないの？

「大人なヨリもよかったけど、そうだね……発展途上のヨリも、背徳感をそそられていいかもね」

発展途上に戻したのはお前だ。

ＢＢから、紫色のオーラみたいなのがほわんと立ち昇るのが見えた。
何、あれ？

すっと顎を取られ、肩から腰へと滑った手が、ゆるゆるとそこを妖しく撫でる。
トップスの裾からするりと侵入しようとしたＢＢの左手と、目の前の長い睫毛が伏せられたのは同時で――

で、

ガツ――――ンッ！

「いだっ」

あたしが頭突きを決めたのは、直後だった。

短く呻き声を上げたBBはしばらくおでこを押さえ俯いていた。
そりゃあまあ痛かろう。
かく言うあたしも痛かった。
……結構、痛いな。

「……やっぱり魅了（チャーム）が効いてない」

また使ったの？
もしかして、さっきの紫色のあれ！？
本当にやめてください、本当に！

むうっと睨みつけたなら、ぐいっと急に覗き込まれた。

「あれ、これはまた大変だね」
「……まだ、何か？」
「ヨリって何か特殊な力とか持ってた？」
「霊能力の類い含め、一切ないけど」
「そう……」

何、何なの、まだ何かあるの！？
もう本当にやめて、早くおうちでビールが飲みたい！
今日は奮発して発泡酒からビールに格上げして買ったんだから。
黒ビールなんだから！
一人今さらな憤慨をしていれば、

「おい、まだか！」

バターンッと躊躇の欠片もなく、硬派くんがドアを蹴破って突入してきました。

「トリエーチ、お前は本当にデリカシーがないね」
「お前に言われたくはない！」

どんぐりの背比べだな。

どうやらよくやく名前の判明した彼、トリエーチはばっとこっちを向いて……

「……本当に女なのか？」

失言を投げつけた。

さっきの真っ裸を貴方は見てなかったの！？

## ヒーロー5

ここまで。

結構展開早い気がしてはいるけど、話自体に展開はあんまりない。
個人的な展開が早かっただけで……人外と致しちゃったよ、あたし……。
お陰様で、喚ばれた理由はぼんやりとわかったけどね。
それしかわかってないし、それさえもぼんやりだけどね。

いいんだ、もう。
気にしないんだ。
生娘でもあるまいし、犬に一発噛まれたと思えば！
若返っちゃったのも、狐に抓まれたと思えば！

……思えば、ね……。

脱力したあたしをあろうことか米俵担ぎで部屋を出たＢＢには、やっぱり、デリカシーは皆無と見たよ。
その見掛け倒し、ほんっと、どうにかしたらいいと思うよ。

しかし。

「でっかいね」
「あそこが？」

やめなよ本当、その絶世の美女顔で。

やめなよ、ていうかやめてください。

「身長が。あたしちびっこだからさあ、羨ましいなあ」

見事に当たり障りなくスルーして、思ったことを口にした。
そう、ＢＢはでかかった。
いくつあるんだろう……１９０以上あるんじゃないのかな。

「ヨリも、見掛けによらずすごくいい具合だったよ。可愛く啼くし、しがみついて離れないし、締まりもいいよね。あんあん言っちゃってさ、あはは」
「……」

スルーしたじゃないか！
何故、わざわざ混ぜっ返すの！？
何故！！！！！
下ネタは内輪の飲み会で充分なんです！

ああ、通路の人達の生温い視線が痛い……。
揺れる見事な真紅を間近で眺めること少し。
担がれたままに、どこぞの応接室らしき場所に到着した。

「いらっしゃい、我らが生贄の最後の者よ」

穏やかながらもからかうようなハスキーボイスからは、すでに『ヒーロー』の言葉さえもなかった。

……本当にただの生贄だったらどうしよう。

未だ顔も見えない声の主に対峙したＢＢが、やんわりと溜め息をつく。

「やめてやってよ、共有が上手くいかなくて混乱気味なんだから」

「お前が失敗したとは、世の中にはまだまだ不可思議なことがあるものだな」

おかしそうに笑ってるけど、あたしは笑い事にも冗談にも出来ません！

ひとこと言ってやりたくてぐいっと上体を反らして……

「む、無理……」

諦めました。

ああ、あたし、背筋弱かったっけ。

情けない！

「あ、ごめんね」

本当に思ってるんだか怪しい謝罪を口にして、ＢＢは、あたしを正面に向けて抱え直した。
降ろす気はないらしい。

で、

顔を見てびっくり。

絶世の美少女が、くつくつと笑ってこっちを見ている！
あれ！？
ハスキーボイスじゃなかったっけ！？
貴女じゃないの！？

まん丸にした目でこれでもかってほど凝視していれば、ＢＢにあっさりと目隠しを食らってしまった。

「せっかくわたしを見ていたのに」
「目が腐るよ、ヨリ」
「ふん、嫉妬か。お前も所詮は雄だな」
「お、雄？」

魔族って、雄雌の判断なんだ！？

一応、不可抗力ながらも情報共有に勤しんでくれた……ええ、もう、そりゃあ勤しんでくれたＢＢのお陰様で、多少の知識ベースはあたしの中にある。

この世界イヴィーには五つの大国と、七つの小国が存在している。
中央を陣取るのがここ、タンジーナバロウ大国。
よりによって、魔族の国なんだって。
魔族の国が世界の中央を陣取ってるってどうなんだろう。

大国は後四つ。

一つ。
山脈と岩壁に囲まれた竜族の住まうドラゴラム大国。
何となく覚えやすいよね。
ドラゴンイメージのネーミング。
ただ、厳ついイメージしか湧いてこない……エウの国なのかな。

一つ。
森と泉、広大な草原を持つ緑豊かな妖精の住まうエルフェニア大国。
これも、エルフイメージで覚えやすい。
きっと綺麗なんだろうなあ、行ってみたいかも。

一つ。
深き森と多数の港を持ち、商業的にも発展を遂げた獣人の住まうベットバビナスタ大国。
……獣耳付きってことかな？
ふわふわがたくさんいるならぜひに見てみたいけど、国名は噛みそうに長い。

一つ。
最後の大国は世界最弱と言われる人間の住まうヒューグ大国。
ここにはどうやら、あたしの同種がたくさんいると予想。
帰れなかったら、諦め半分で勝手にここにお世話になるつもりでい

る。

さて、ここであたしは思考する。

大国は五つで、共有された知識（データ）ベースによると、『生贄ヒーロー』はどうやら五人。

言わずもがな、ＢＢ、エウ、ディル、トリエーチ、そして何故だか召喚されたあたしのことだ。

予測してみよう、いや、してみたい。

ＢＢは淫魔族、つまりは魔族ってことで、タンジーナバロウ大国代表？だとする。

エウは自分で竜族って名乗ってたから、ドラゴラム大国代表。

ディルはキンキラキンの色彩と現実離れしたビューティーオーラから、この理屈で当て嵌めるなら妖精国エルフェニア大国代表としよう。

トリエーチは……見たとこ、普通なんだよね。

群青色（ウルトラマリンブルー）の髪色とか、ありえないんだけど、まあ、見たとこ普通。

ヒューグ大国人間代表？

あたしは？

異邦人代表？

そう考えて首を捻った。

ベットバビナスタ大国代表はいないの？

「……ねえ、トリエーチってフルネームは何て言うの？人間でしょ？」

「私は人間などではない。トリエーチ・ポーリー、獣人だ」

絶句。

あ、あたしの膨らみつつあった妄想を返してください！
獣耳どころか、全然全くふわふわしてないじゃーん！
硬い！
硬いよ、トリエーチ！
それがこの世界の獣人だと言うのかトリエーチ！

「……トリエーチはベットバビナスタ大国代表？」

ふと、おかしなことに気づいた。
おかしなことってのがすでにおかしいけど。
あたしがここに存在すること自体、すでにおかしいのだから。

でも、おかしい。

「国についての共有は問題ないみたいだね」

にこりとＢＢが間近で妖艶に笑う。

「生贄代表という意味なら、そうだろうな」

何てことはない顔でトリエーチが答える。

「ヨリが召喚されてくれたお陰ですぐに死ななくて済んだんだから、よかったじゃない！」

「ねっ！」と、場違いなほど眩い笑顔でディルが言う。

「予想外だったがな」

真顔でエウが相槌を打つ。

待って。

よくわからないなりに考えてみるから。

つまり、四人はそれぞれに人外であって、人間じゃないってこと。

生贄ヒーローは五人。

残るはヒューグ大国……人間代表の生贄。

「あ、あたしは……異邦人代表じゃなくて、ヒューグ大国代表の生贄って……こと？」

まさか――まさか、まさか。

「人間てのは狡賢いよね。自分達から生贄を出すのが嫌だから、わざわざ無関係な異邦人を召喚する。召喚が失敗するたび、他の生贄四人を無残に殺すんだよ。『剣(つるぎ)』と相性が悪いからだって言ってね」

BBが肩を竦めて笑った。

――殺、す？

他の四人を？

「しかし、タトゥーナが人であると記されている以上、真の『英雄(ヒーロー)』は人間であることに違いないからな」

エウの声がどこか遠い。

真の英雄？

人が……そんな、世界を呪うような人が英雄(ヒーロー)？

「まあねえ。現に初めて召喚した異邦人が、これまた初めて剣を鞘に収めちゃったもんだから、それがベストだ！って思い込んじゃってるし」

やっぱり、その眩いディルの笑顔は、場違いな気がした。

「お前は第五の生贄英雄(スケープゴートヒーロー)だ。お前の行動と結果如何せんに、私達の命が掛かっている。……忘れるな」

最後にトリエーチの無情な台詞が脳内をごわーんっと叩いて、

「……ふうー」

間抜けな声と共に、あたしは意識を手放した。

こんなとんでもハプンな予測は、当たらなくていいのに！

## ヒーロー5（後書き）

トリエーチの名前はロシア語からの拝借です。
【トリエーチ】は【第三の】
【ポーリ（作中ポーリーと表記）】は【宿命】
だそうです。
大層な名前ですが、気に入ってます。

## ファンタジーワールド

さて、またもや卒倒したあたしですが、理不尽な現状に目を覚ましたわけです。

「なっ……ひあっ」
「起きた？ああ、いいよ、無理しないで俺に委ねて」
「な、にが……あっん！」

……言わずもがな、散々啼かされました。
起き抜けだっつうの！
委ねるも何も、合意をすっ飛ばしてすでに致しちゃってるって、頭の中どうなってんの！？

と思ってＢＢを引っ叩いたのは、それからおよそ三時間後のことであって。

「声が枯れてて何言ってるかわからなかったよ」

とは、引っ叩たかれたことさえ気にも留めないＢＢの言葉。

淫魔族って絶倫なの？
そして傍若無人？
傍若無人で絶世の美女顔で、もしかしたら、ついでとばかりにとんでもなくチートとか？

チートは最近覚えました。
元いた世界で、完璧な人を友達がそう呼んでいたので。
ちなみに、そのときにようやくリア充って言葉も知りました。

ああ、俗っぽいあの世界が懐かしい！
いやね、ここも、少なくともＢＢは半端なく俗っぽいけどね！
……淫魔族ってくらいだし、あたしの精気でも食ってるのかな。
こーわーいーっ！！！！！

「で、どう？」
「美味しい」
「それはよかった。ただ、そこじゃないんだけどね」

自らの行為を正当化したいのか単なる気紛れなのか、腰砕けで動けないあたしに紅茶を持ってきてくれたＢＢが、苦笑を滲ませてそう言った。
まあ、最初からこういうところは優しい。
それが何故に、移動となると米俵担ぎなのかはわからないが。

「まあ、俺は大抵わかったからいいけど」
「何が？」

どうでもいいけど、何で全てを語らないかな。

わかりやすく簡潔に、まとめて喋って、お願いだから。

「情報共有。再度試してみたんだ。今度は上手くいってると思うんだけど、どう？」

「……他にどうにか出来ないの？」

普通に説明するとか、何かあるだろ、何か。

しかしながらBB曰く、ヒーロー5（戦隊ものみたい）に魔族から淫魔が選ばれるのは情報共有が可能だからで、所謂（いわゆる）義務みたいなものらしい。

異邦人からしたなら傍迷惑極まりない話だけど、淫魔的に、それは対したことにはならないらしく。

何でも、異邦人の精気は格別に美味しいんだとか。

……やっぱり喰ってた……。

でも、今みたいに普通に説明すればいいのでは？

と思ったけど、もう言うだけ無駄な気がしたので、それは何とか飲み込む。

あたしに大事なことは、如何にしてセクハラとパワハラと下ネタを躱し、無事帰還を果たすのかということだけ！

そしてその後の確認により、世界に体が馴染んだらしいあたしの情報共有は、今度こそ、上手くいっていたのでした。

「残念」

ＢＢが呟いた言葉は、聞かなかったことにする。

場所は変わってさきほど担がれてきた応接室。
腰砕けなあたしは、やっぱり担がれてます。
やっぱり米俵で移動させられて、ここで肩に乗せられました。

肩にだよ。
どういう頭の構造してるんだ。

ハスキー美少女は結局、淫魔族の雄だったようで　（情報共有の賜物）　名をゼルガスディ・ジャガール・バルボッサと言うらしく、
しかも、何と魔族の長だとか！
うおおぉおっ、まさかの魔王様出現！

魔王様か……見掛けによらず厳つい名前だなあ。
魔王っぽいような気がしなくもないけど。
ファンタジーね。
緩やかな流れる川のようにウェーブを描くＢＢの真紅の髪とは対照的に、魔王様の髪色は淡い金色でドストレート。
それをハーフアップにしていて、目は濃紫色、手足はおそろしく白く、やっぱり黒いロングワンピースみたいなものを着ている。
……どう見ても、十七、八歳程度の美少女。

もう、見掛けには騙されないようにしよう。

如何に美しい面の皮でも、一枚剥げは、皆、淫魔！
これを今日より、教訓にしたいと思います！

「で、だいたい理解したのか？」

やっぱりハスキーボイスな魔王様。
馴れちゃえば、このギャップは意外に絶妙なのかもしれないけど……

「……お陰様で」

現在あたしは、ＢＢの右肩に座っているわけで、頭上高くから魔王様を見下ろしている。

誰も突っ込まないけど、これ、ありなの？
大丈夫？
突然「無礼者があっ！」とか、ぶち切れたりしないでくださいね！
あたし、普通の異邦人なんで！
対魔力戦とか無理なんで！

あたしの思考がどうであれ関係ないらしい魔王様以下従軍は、あれよあれよと話を展開していく。

そっちの勝手な都合で召喚されたあたしは、最初からずっと置いてけぼりだ。
そう、本当の最初っからね！

「で、いいか？ええっと……」
「ヨリです。木村ヨリ」
「ヨリ……ヨリか、わかった」

魔王様はあんまり覚える気もなさそうだけど、まあいいか。

そんなこんなでつまり、旅仕度は任せとけ！
三日後には出発しろ！

ってことでした。

で、

帰れるの？
帰れないの？
獣人はやっぱりあれなの？
ふわふわしてないの？
竜族ってやっぱりドラゴン的なものなの？
変身とかしちゃうの？

どうなんだ！

異論は山とあれど、魔王様の無言の威圧の前に、言わずして塵と散ったのでした。
ＢＢ、腰を摩るのはやめて。

で、翌日。
至れり尽くせりでご飯はそりゃあ美味かった。
どうやら魔族だろうが獣人だろうが、普通に食事をすることは可能らしい。

エウ曰く、

「人型を持つ以上、人を真似て暮らすこともあるからな」

だそうで。

それはつまり、食べなくても大丈夫ってこと？
そしてまたつまり、やっぱり変身しちゃうということ？

ふと湧いた疑問をＢＢに悟られると厄介なので、デザートが運ばれてくるまでに、無理矢理詰め込まれた知識（データ）ベースを何食わぬ顔で漁る。

ここ、世界の中心であるらしいタンジーナバロウ大国は、言わずと知れた魔族の住まう国。
魔族は闇に住まう者――というイメージ何のその、普通に朝と昼もあれば、他国から勇者が攻めて来るようなこともなければ、普通に国交もあるそうな。
ただ、ヒューグ大国との仲は水面下でのいざこざは付きものらしく、表面上上手く誤魔化していると言った感じだそうで。

……何か、曖昧な情報だな。

魔族とは、大まかに三つの種類に分けられるらしく、魔人、魔獣、魔物の順に、強さと知性は下降する。
魔王様とかＢＢは魔人レベルで、つまりは魔族の中でもその他を押し退け統べる上位魔族だということ。
魔人レベルで、ようやく人型を持つことになるそうな。
魔族はもともと精気を糧に生きているので、人のような食事は不要だけど、単純に美味しいと思うから食べる者が多いらしい。

趣味みたいなもの？

エウが属する竜族は、まさしくドラゴンそのもの。
知識（データ）ベースが引っ張り出してきた見たことも聞いたこともない謎の本の挿絵が、ぽんっと頭に浮かぶ。
どうやら変身後の姿は、東洋の竜と言うより西洋の竜の姿に近いらしい。
変身後……いや、それとも本来の姿がそっち？
エウが着ている服は、どっちかと言うとチャイナドレスっぽいんだけどなあ。
で、これまた食事自体は基本的に摂らなくてもいい構造で、竜族に至っては自然の生気を糧にしているそうな。
ただ、ドラゴラム大国は自給自足で畑なんかも耕しているそうだし、家畜もいるらしい。

そして、一番興味津々なのが、獣人の生態！

さあ、がんばって知識（データ）ベース！
あたしの想像を裏切らない成果を見せて！

ベットバビナスタ大国の情報が、ぱぱっと頭に浮かぶ。
……すごく頭がよくなったような勘違いに陥りそうでこわい。
獣人ていうのは、所謂　亜種、亜人と呼ばれる種族なんだそうだ。
魔族や妖精族、竜族なんかと人が混じって生まれた人達。
ハーフだと獣人になる確率が高いらしく、他と比べて国の歴史も種族の歴史も浅い。
魔族との混血の場合、魔力値が高いと魔族の方に属する場合があったり、竜族との混血は竜体に変化が可能ならそっちに受け入れられたりもするらしい。
ただ、妖精族との混血は妖精としては半人前にしかならないらしく、獣人に属することがほとんどだそうな。
けど、人間より圧倒的な体力と知力、能力を誇り、１．５倍の寿命でもあるらしい。
で、肝心のふわふわは……

「……やった――――っ！やっぱりいるんだ――――っ！」
「何が？」

思わず歓喜の声を上げたところで、ＢＢに、最もな疑問を投げられました。
あ、デザート来てた。

ところで。

妖精族の国エルフェニアの情報がほとんどなかったのは、どうしてだろうか。
ヒューグ大国については、心象が悪かったからか、特に興味は湧か

なかった。

自分達から犠牲を出したくないから異邦人を喚ぶって、しかも、それが上手くいかなかったら他の人達を殺すって……。

いくらあたしが楽観的に生きてきたと言っても、それがよくないことだってくらいの分別はつく。

まだ、ことの次第がはっきりわからないから、今は言及しないけど……。

何はともあれ。

淫魔になすがままにされた上担がれたり、魔王様を上から眺めたり、デザートもすこぶる美味しかったり、いろんな人達が暮らしていたり。

どうやら、思っていた以上に、この世界はファンタジーなようです。

……で、済めばいいけどなあ。

## デビル・ザ・ナイト

現在、括られてます。
「どこに？」って聞きたいじゃない？
聞きたいに決まってる、人とはそういう生き物だから。
わかってる、あたしはわかってる。
だから、声も高らかに教えてあげます。

――丸太にだよ！

「ダンダライーヤーダンダラヤー、ダンダライーヤーダンダラダラダラ」

踊ってます。
目の前で、なまはげみたいな仮面を付けた謎の部族達が。
謎の歌詞を恭しく歌い上げながら。

ねえこれ、もう、どうしたらいいの。
どっから突っ込んでいいかわからないんだけど。
なまはげならなまはげらしく、出刃包丁持って「わるいごいねがー！？」でいんじゃないの？
そっちの方が、やりたいことがわかりやすいと思うよ。
「ダンダライーヤー」じゃさあ、括り付けられてる側としても、反応に困るわけ。
何となくわかるけど、それはそれで、やっぱり反応に困るわけよ。
だって、わかりたくなんかないじゃない！

またも混乱状態で、自分の思考回路さえセーブ不可能だ。
もしや「ダンダライーヤー」ソングは混乱呪文か！？

「ダンダライーヤーダンダラヤー、ダンダライーヤーダンダラダラダラ……イヤ！」

バッ！と素っ頓狂なポーズを決めて、謎の部族達による謎の演目は終了した。
「イヤ！」は決め台詞だったわけね。
噴かなかった自分を褒めてあげたい。
猿轡嵌められてる状況は、ある意味、功を奏したと言って過言じゃないのかもしれない……そんなわけあるか！

「呼んだか」
「ぶっ――んぐっふっ」

功を奏しませんでした。
猿轡嵌めた状態で噴き出そうとすると、噴き出した反動で若干前傾姿勢になるので、口の端に丸太ごと縛られた縄が食い込んでものっそい痛いです。
もうしません、我慢します。

だって、突然何処(いずこ)より登場ましましたこの人、「呼んだか」って言ったよね？
ダンダライーヤーソング　（命名）は混乱呪文ではなく、この人を

呼ぶための召喚ソングか何かってことでしょ？
あたしだったら、あのソングで呼ばれたくない！
末代までの恥にもほどがある！

「お前が異界より召喚された生贄か」

……ああ、この人も生贄って言った。
ヒーローはどこに行ったの、生贄ヒーローが正式名称じゃないの？
そもそも、生贄とヒーローを一緒くたにするのが間違いだと思うけどね！
現状では生贄で間違いなさそうだけど。

ダンダライーヤーソングで呼ばれたらしい彼は、真っ黒なロングのフードコートを着ていた。
顔は見えないけど、刺さるような鋭く冷たい声をしている。
その彼が、ぱさっとフードを取った。
……これはまた、ＢＢやディルとは違う、ずいぶんと冷涼な美形だこと。
エウも涼しげな美形ではあったけど、割りと逞しい男性的な感じだった。
それよりもっと線が細くて、ナイフみたいで、中性的だ。
彼は一通りあたしを舐めるように上から下まで観察して、ふっと、嘲笑いながらこう言った。

「私はダンダライーヤー・ダン・ダラヤ。拝めたことを光栄に思え」

あたしはまた、噴いた。

――遡ること数時間前。

「本当に大丈夫？」
「大丈夫です」
「だけど、」
「結構です」
「でも、」
「結構です」
「やっぱり」
「結構だっつってんだ！」

散々一緒に寝るんだと聞かないＢＢを押し退けて、あたしはようやく平穏無事な夜を手に入れた。

「ええー、ヤろうよ」

何をだ！

ドア向こうからした言葉に思わず言い返したくなったけど、敢えて無言を貫きやり過ごした。

構ったぶんだけ攻防戦は長引く。
スルーに無視が一番！

どうやら、鍵を掛けなくても入って来る様子はない。
ＢＢはね……他は知らんが。
鍵、付いてないけどね。

そんなわけで安らかにベッドで爆睡してたのだ。

――で、今に至る。

何これ、特に説明とかいらないような……。
て言うか、攫われたなら攫われたで、何で起きなかったかな自分！
ウェイクアップですでに丸太に括られてたって、どういうことだよ！
それ以前に、ＢＢ達は何してんの？
勝手に召喚したんだから、もっとこう、責任持って欲しい！
謎の演目を終始見せられたあたしのいろいろと複雑な心境をどうしろと！？
てか、この人どうしたらいいの！？

「ふん、あまりの恐怖に声も出ないか」

猿轡外してくれたらレスポンスは可能なんですけどね。

「お前がいては困るのでな。……まあ、察してはいるだろうが」

やっぱり、そういう流れ！？
どうしよう……台詞に全く捻りもくそもなければ、結果までがお決まりのものらしい。
こういうところはセオリーなんだ……最初はあんなんだったくせに。
ダンダライーヤーは薄く嘲笑(わら)ったまま、謎の部族に支持を出す。

「燃やせ」

わああぁぁ！
だよね、やっぱりそうだよね！
足元にやたらと藁とか小枝とか盛られてるもんね！
ど――――しよ――――っ！？

「ふむむほへふはははい！（ほんとごめんなさい！）ほふはははははいはは！（もう笑わないから！）いいははへはほほほふはらーっ！（いい名前だと思うからーっ！）」

あたしはテンパっていた。
混乱と恐怖真っただ中だった。

ゴツッと鈍くも響く音がして、ドサッと何かが倒れる音、それから、謎の部族　（この人達は何なんだ）がどよめき出すまで、目を瞑っ

ていたから。

「また君か」
「……――？」

……聞いたことある声だな、と思って、そっと目を開ける。
まだ足元は燃えていなくて、そこには――

「お待たせ」

にっこりと場違いに妖艶なる笑みを浮かべた美女――もとい、ＢＢが、ダンダライーヤーを足蹴に、鉄パイプを持って立っていた。

ごめん。
やっぱりいろいろ、どうかと思うよ。

「いやあ、まさかダンがこんな行動に出るとは思わなくて。まあ、実行したのはダンの下僕達だけど、完全に隙を突かれたみたいでね」

丸太から下ろされたあたしは、猿轡を外してもらいながら怒りマックス。
気絶したダンダライーヤーがＢＢに片手で引き摺られてて大変なことになってはいるけど、そんなのは自業自得だ。
今なら限界突破で９９９９のクリティカルヒットが出せそうだよ！

「何、隙って！あのね、勝手に召喚したんだから、警備とか保護とかそこんとこちゃんとしてくれないと困る！生命の危機とか困る！」
「まあ……でも、なかなか笑えたでしょ」

生命を賭けた笑いはいらないから！
いや、笑っちゃったけど！
不可抗力で異議なし！

ちなみ、謎の部族はやたらとおとなしくなってはいるけど、目がちょっと危ない。
たぶん、ＢＢの魅了（チャーム）にやられてる。
薄ぼんやりと紫色の靄（もや）が漂っているのが、何よりの証拠だ。

「そんな怒らないで。ヨリもよくなかったんだから」
「あたしが？何で」
「一緒に寝ればよかったんだよ」
「やだ」

即却下。

「……やっぱり、魅了（チャーム）が効いてないね」
「あたしにまで掛けたの！？また！？」

だから嫌なんだ！と言おうとしたなら、先に口を開かれてしまった。

「追い出された後、ヨリの部屋に結界を張ろうとしたけど無効化された。いろいろ試してはみたけど、全て効かなかったんだよ。で、ドアを開けたら、すでに攫われた後だったってこと」

その短時間で爆睡の域に到達出来る自分がすごい。

「……結局ドアは開けたんだ……」

「まあね」

選択肢は最初から『犯(ヤ)られる』か『殺(ヤ)られる』しかなかったらしい。

……何故この二択。

奇跡の『無事生還』コマンドが出たので、終わりよければ全てよしにしとこう！

何とかイベントを自分的に消化しようと奮闘しているうちも、ＢＢは説明を続けている。

「だからつまり、ヨリは『無の魔力』持ちだってことだね」

無の魔力？

ああ、何か最初にそんなこと言ってたような。

無の魔力、無の魔力――知識(データ)ベースを無言で漁る。

『無の魔力』――全ての魔力を無効化する魔力。

ガ――――ン！

召喚されてから二度目の金だらい落下が見えた気がした。

「何、無効化って……結界も無効化されちゃうなんて、何て使えない魔力！」

「だから一緒に寝ようって言ったんだよ」

「違う！ＢＢは『ヤろう』って言ったの！」

「どうせ一緒にいるならね」

落ち着かせるために頭を撫でてくれていただろうその手の動きが、微妙に妖しくなってきたので、バシッと叩き落とした。

もうやだ！

まだ二日目なのに、この仕打ちは何！？

「うーん……わかった。今日はしないから、おとなしく一緒に寝て？」

「ね？」といたずらっ子みたいに微笑まれて、少しだけ、ＢＢが素敵に見えてしまったのは、きっと、何だかんだで助けてくれたからかも……しれない。

小さく頷いたあたしをまたもや米俵担ぎして、片手には鉄パイプ、足でダンダライーヤーを踏み付けたまま、ＢＢは一瞬にして、お城

に帰還したのでした。

流石は上位魔族。

鉄パイプは忘れよう。

ようやく本当の安眠を手に入れたあたしは、ダンダライーヤーについて、すっかりさっぱり忘れ去っていたのだった。

## ノンパレイルキッチン

翌日朝、魔王様に呼ばれてあの美少女面を拝見して、ようやく昨夜のとんでもハプンを思い出したあたしは、それゃあもう抗議した。
魔王ゼルガスディは「ふうん、そうか」と素っ気なく言っただけで、労わりの言葉とかは特になかった。
興味ないにもほどがあるでしょうよ。
あたしが起きなかったのも悪いが、それ以前の問題でしょうよ！
それでも挫けず抗議しまくったら「だから、ＢＢが一緒に寝ると言っただろう」と、射殺さんばかりの視線で言われ、強制終了。

魔王様、血も涙も興味も皆無。

何なの、あたしは重要な生贄ヒーローじゃないのか。
死んだら困るだろ、あたしも貴方達も！
いや寧ろ生贄だからいいと言うか！

憤慨冷めやらぬあたしにＢＢが苦笑を漏らす。

「あれでもゼルは心配したんだと思うよ」
「どこが！」
「普段なら一言だって話さずに目で射殺して終わりだから」

……目で、本当に射殺せるんだ？

これ以上は恐ろしいので、いろいろと黙殺して強制終了。

で、今。

突然ですが、旅立ちを迎えている。
昨日の今日で？
ねえ、あの、本当に魔王様、あたしのこと心配してた？
攫われたのって昨夜だよね？
乙女に対してこれは、あまりに配慮がなさ過ぎではないの、ねえ？

……まあ、しつこいしもういいや。
よくわからんが、剣を鞘に収めないと帰れないんだもんね。
やりますよ、やるやるーあたし超がんばっちゃう！
……で、何するわけ？

「ヒーロー御一行出立！開門！」

仰々しく高らかな声と共に、そびえんばかりにどでかい門が、ギイ――――ッと開く。
外に出たのが誘拐以外になかったからあれだけど……何か、魔城って感じじゃないんだね。
もっとこう、おどろおどろしいデザインなのかと思ってた……イメージカラーは黒と紫、蜘蛛の巣はデフォルメです、みたいな。
そう言えば、城内も白と木目ベースで小綺麗だったな。

案外、普通。
存外、落胆。

ＲＰＧのボスキャラの城をイメージしていたのに。

もっとあたしを落胆させたのは、ある意味想像通りの活気溢れる城下町だった。
所々街道に沿った植え込みは綺麗に切り揃えられているし、大通りは馬車（馬らしき生物が引いているから）が通りやすいようにか歩きやすいようにか、石が敷き詰められている。
建物はレンガ造りで、結構普通だった。
本当、西洋の街並みみたいなイメージ。

活気、超溢れてる――『人』がいないけど。

爬虫類っぽいけど二足歩行で人語を解する謎の生物から豚っぽい生物　（獣人とどう違うの？）から兎の耳をくっつけた……でも顔はライオンで尻尾は蛇の生物などなどなど、バリエーションは幅広く揃えているようで。
ときどきやたらと美人が混じってるんだけど、あれが魔人かな。
その隣を歩いてる男（雄？）があきらかにもう人型じゃない何かなんだけど、魔人さんは頬を染めてはにかんでたりするから、まあ……いいのかな……趣味嗜好は本人の自由ということで。

そんなわけで、あたし達ヒーロー御一行は出発したのである。

「え、もう休憩？」
「休憩ではない、今夜はここ、ノンパレイルキッチンに一泊する予定だ」

魔王城を出て訳一時間、がったんと馬車が止まったのは、城下町ど

真ん中のとあるお屋敷前だった。
休憩かと問えば、全く表情の変わらないエウに即座に否定される。
されたうえ、仰天の事実がその口から飛び出した。

「は？え、一泊？ここに？」
「そうだよー。ここはね、いろいろ揃えるのにちょうどいいんだ」

にこっとキンキラ王子ディルが無邪気に笑ったけど。
いや、いやいやそうじゃないだろう。
さっき出たばっかじゃねえか！

――で、

「待って、さっき何て言った？」
「いろいろ揃えるのにちょうどいいって」

かくっとディルが首を傾げるが、聞きたいのはそこじゃない。

「その前」
「休憩ではない」

エウが淡々と答える。
お前の表情筋は飾りか。
それはまあいい。

違う、そこまで遡らない。

「その次」
「ノンパレイルキッチンに一泊する」
「ノンパレイル……キッチン、だと？」
「ここの城下町の名前だけど、どうかした？」

せっせと馬車から荷物を下ろしに掛かっていたＢＢが、あたしに視線を投げた。

――魔王城の城下町が天下の台所（ノンパレイル キッチン）って、どういうことだ！！！！！

「ネーミングセンス皆無！」
「うるさいぞ！さっさと降りろ！」

トリエーチに引きずり降ろされながらも、あたしは納得出来なかった。
てかあんた、マジであたしのこと女と思ってないでしょ！？

## ノンパレイルキッチン（後書き）

ノンパレイルキッチン
和訳／天下の台所、または無類の台所（都市）
という意味。

≠？

そこはおどろおどろしいお屋敷だった。

魔王城で期待したデフォルメそのままに、＋αでとにかく日当たりがよろしくない。

鉄格子が嵌められた窓は、重厚なカーテンの隙間からは割れたガラスが覗いている。

ギャアギャアと謎の黒鳥が鳴き喚き……ちょっとでか過ぎだろ、あの鳥、怖いんだけど。

とにかく、魔族の住まう国のイメージそのものを凝縮したかのようなお屋敷だった。

「ち、ちょっと、何ここ、こんなとこ泊まるなんて無――」

「や……やあやあ、よ、よう、こ……そ……わ、我が屋敷、へえぇぇ……ぐええっほ！げっほ、げっほ！」

「旦那様！ご無理はなさらずにとあれほど……！」

「だ、大丈夫……じゃ、けえ……ゼーゼー」

あきらかに大丈夫じゃなさそうだけど。

某沈没豪華船映画さながらな中央階段　（でもおどろおどろしい）

からえっちらおっちら降りてきたお爺ちゃんが、ゼーハー言いながら使用人らしき青年に止められていた。

咳き込んだりしてるけど……掃除しないからじゃない？

持病持ちなら、ハウスダストも気にした方がいいと思うよ。

否定の言葉を遮られたことより、お爺ちゃんに興味が行ってしまった。
腰痛なのか年なのか、ばっきり二つに折った腰、ついた杖は腕力さえ弱っているのかカタカタと震えていて、うっかりすると持ってない方が安全なんじゃないかと思わせる。
薄っすらと残ったロマンスグレーを何とか無理矢理後ろに撫でつけ、自宅らしいのに着ているのは燕尾服。
ついでに、使用人らしき青年が着ているのも蝶ネクタイ付き燕尾服。
皺々の顔は日に当たっていないからか真っ白で、蓄えたロマンスグレーの髭は小綺麗にデザインされており、それが何だかアンバランスだった。
たぶん、背は低くないと思うんだけど……てか、青年はやたらとこれまた美形であらせられること。
魔人か？
てことは、彼をお抱えにしているお爺ちゃんも魔人？
魔人て、お爺ちゃんもいるの？

と、ここでエウがついと前にでる。
何何、もしやエウも負けず劣らずハウスダストに弱くて一言物申すとか？
おう、言っちゃれ！

「久しいな、ドラキュラ伯爵」
「……」

予想を斜め上行く発言に、ガ――――ン！と、またも金だらい落下が見えた。

現在、あたしは応接室で茶をしばいております。
ここ――ドラキュラ伯爵邸で。

「す、すまん、のううぅ……わざわ、ざ、げーっほげほげほげほげふっ……あーっとぉ！ッカー、ぺっ！」
「旦那様、絨毯に唾を吐かないでください」
「おお……す、すまん、のー」

お爺ちゃん、最後まで喋れてないよ。

さて、言わずもがなドラキュラ伯爵と言えば、15世紀のルーマニアの領主であり別名串刺し公と呼ばれたヴラド・ツェペシュをモデルに、イギリスのアイルランド人作家、ブラム・ストーカーが書いたホラー小説が有名だけど……

「して、皆様、は……あ”――――っ、げっほ！」

だけど……

「如何し、て……ごっほぅえーっほ！」

だけど……

「こちらに、いらっしゃった、の……でえぇっほ、げっほ！」

「わたくしが変わってお話させていただきます」

その方がいいね、異議なく満場一致だしね。

だけど、ドラキュラ伯爵ってあんなんだったの？

まあ、世界が違うわけで、たまたま名前が同じだけかもしれないけどさ。

でも、ノンパレイルキッチンがあるなら、ドラキュラ伯爵がいたって別にね。

おかしくはないように思うんだよね。

ドラキュラとか言ったってお爺ちゃんだし、てか、何でもありなんでしょ、きっと。

上手く（？）翻訳されてるだけかもしれないしね。

ドラキュラお爺ちゃんについては、敢えて知識（データ）ベースも漁らないことにした。

と、ここでまたもやエウが口を開く。

「現魔王から通達があったと思うが、届いていないだろうか」

と、答えるは美形青年執事。

「はい、届いております。ヒーロー御一行様を一泊と、装備諸々の準備でございますね。しかと、承る所存にございます」

と、ドラキュラお爺ちゃんが。

「え、ええ、そうなん……ジーヴァ、お主、そ、そんなこ……げーぇっほげほ！」

「お部屋はすでにご用意してあります、エウ様」

お爺ちゃん、普通にスルーされてるけど、旦那様じゃなかったのか。最初の方こそ心配されてる様子だったけど、後は微妙に　（かなり）　蔑ろにされている。

威厳ナシ、ドラキュラお爺ちゃん。

もうお休みになられたら如何かと、進言したいくらいの扱いだ。

いろいろ今さらだが、ふと、湧いた疑問を口にした。

「あのさ、準備って、魔王様がすでにしてくれたんじゃないの？」

だから出発に三日も要したわけでは？

すぐそこの城下町（ノンパレイルキッチン）に一泊する意味が見出せず首を傾げたなら、あまりにさらっと、ＢＢが答えをくれた。

「あのゼルがそんなことするわけも出来るわけもないよ。彼はね、無類の怠慢魔王なんだ。ここの宿泊許可願いを直々に書いただけでもよく働いた方だよ」
「だな」
「だね」
「魔力と容姿だけの魔王だと聞いてはいたが、あれは本当だったのか」

続いたエウ、ディルは魔王様の実態をどうやら知っていたらしい。
最後のトリエーチに限っては、呆れついでに眉を寄せていた。

上記の様子から推測するに、魔族（タンジーナバ）は竜族（ウゴラム）、妖精族（エルフェニア）とは、どうやら国交が盛んらしい。
獣人族（ベットバビナスタ）とは、噂が及ぶ程度ってことだろうか。
ＢＢは魔王様をゼルと呼ぶけど、結構深い仲ってこと？
それとも、あたしが常識とするような主従関係と魔族のそれは、ちょっと違うのかな。

ここで出番の知識（データ）ベース――

「ああ、俺とゼルは幼馴染なんだよ。生まれた時期が一緒でね、彼が魔王に就任して、俺は補佐官の役割を与えられたんだ」

……せっかくの知識（データ）ベース、出番ナシ。

いやいや、まだまだ！

さっきからほら、何故かドラキュラお爺ちゃんとエウは顔見知りっぽいし？
そこを漁って――

「ちなみに、ドラキュラ伯爵は我らが竜族の血を引いている。格はわたしが上なので、魔王の手紙に一筆添えたのだ」

エウがすかさず補足説明までしてくれた。

「……あのさ、」
「どうした」

表情筋という言葉が辞書にないエウに、「……何でもない」と言うしかなかった。
情報共有、本当に必要だった？
ねえ、必要じゃなくない？

……あれ？

「えっ？ドラキュラお爺ちゃんが何だって言った？」
「竜族の血を引いている」

え。

「えええぇえ――――――っ！！？？？、て、ちょ、腰を撫で摩るな！」

何故かこのタイミングでさわさわと動き出したＢＢの手を叩き落とし、それでも驚愕は止まらない！
ＢＢの厭らしさ全開な艶笑も止まらない！
止まらないよノンストップ！
ＢＢのにやにやは止まれ！
じ、じゃあ、お爺ちゃん　（ドラキュラ省略）　竜になれちゃうの！？
いや、なれなかったから魔族（タンジーナバロウ）にいるのか！？

「旦那様は竜族とのハーフでして、竜型は中途半端以下だったのですが――それにしてもずいぶんと今回の異邦人の方はお若いのですね――魔力は高く――おいくつですか？未成年？――よって、こちらに屋敷を構え、奥様と一緒にお世話に――と言うか男子（おのこ）？女子（おなご）？――なっている次第でして――ＢＢ様のお手つきですか？女子（おなご）でしたらすでに処女（おとめ）ではないですか？――わたくしも同じく竜族の血を引いてはいますがクォーターでして――それにしても幼いですね――竜型は取れません」
「……そ、そうなんだね」

ジーヴァと呼ばれていた青年執事が、いろいろだだ漏れ状態で話してくれた。
初対面でこれだけ失礼にだだ漏られたのは、人生初だったよ。
失礼だけなら三日前に経験済みだけど、あれはドストレートだった

からなあ……現在進行形だよちきしょうめ。

「最初から処女(おとめ)じゃなかったらしいよ」

何故このタイミングでディルはそのレスポンス選択したの、ねえ！？
キラキラエフェクト掛けてりゃいいってもんじゃないから！
いっつも必要なことは言わないくせに、本当、下ネタだけはレスポンス最速だなこいつらは！

こ　い　つ　ら　は　！！！！！

――そして、衝撃の事態まで、後数時間。
ということに未だ気付くはずもなく、ただこの時は「いつ旅は始まるんだ」と、ＢＢの手をまたもや叩き落としながら考えているのみだった。

お爺ちゃん、寝落ちしてたけど。

## ≠？（後書き）

ドラキュラ

ルーマニア語／『竜の息子』という意味があり、また『竜は悪魔』という意味もあるらしい。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5475w/

生贄ヒーロー

2011年11月21日20時05分発行